

後世に語り継ぐ、大洪水の記憶

突然切れた天竜川の堤防

浜松市南区石原町 今村芳子（職部黨夫氏の姉）

昭和の初期に生まれ、昭和の激動を生き抜いてきた私たちには、頭から消えることの多い多くの出来事があります。中でも私にとってはあの天竜川堤防の決壊のことです。

あれは昭和20年10月5日、例年なら台風シーズンも過ぎて田面が黄金に色づく頃でした。あの日は朝から前が見えないような豪雨でした。屋前には堤防が切れそうだということで、村の人たちが大勢土のうを積みに入りました。しかし、戦争中の防空壕が堤防の東側から西側まで突き抜けだったのです。いったん水が漏れ始めれば、ひとたまりもありませんでした。私も家の水揚げをすませ、川を見に行きびっくりしました。あの高い堤防から手を洗えるくらいで、揚子江を連想させるほどの大河になっていました。

そのうちに突然、「切れた、早く逃げろ!」と言う叫び声がし、私は素足になり、一目散に家に逃げ帰り、東の方を見ると、もう濁流が滝落としのように流れ込んでいて、みるみるうちに濁流の海と化していききました。東隣の人たち、分家の人たちが木々につかまり、私の家に逃げてきましたが、2階に上がり、濡れた衣類を着替えるまもなく、私の家も長屋、小屋、母屋とメリメリと瞬間に壊され、2階の部分だけがころうじて残りました。皆が窓から屋根へ出て、細葉（生け垣）を伝って逃げました。が、後はどうすることもできませんでした。

小さい子供たちの「怖いよう、怖いよう」と泣き叫ぶ声が耳に残っています。堤防の上では大勢の人たちが見ているのですが、荒れ狂った濁流になすすべもありませんでした。そのうちに2階部分も壊され、これを最期にみんな濁流の中へ流されてしまったのです。母と東の叔父さんだけが、西の

家の流れ残った細葉にたどり着いたのですが、細葉の流れるほうが早く、母は妹を背負ったまま流れていってしまいました。

私は、傾き流される寸前の西の家のどんぐりの木にしがみついていた。すると下の方で何か動く気配がするので、声を掛けると西の家の静子さんでした。そんなところにいとと死んでしまうからと、引っ張りあげて2人で体を寄せ合い、寒い一夜を過ごしたのです。夜中、ガタガタと音を立てて壊されていく家、「オーイ、オーイ」と助けを求めながら流されていく人の声、下は冷たい天竜の水。ようやく東の空が明るみ始めたのを見て、やっと助かったかなと思いました。その一夜の長かったこと、屋前に救助船が来てくれて助けられたのです。

しかし、また、これからも試練でした。川のようになった屋敷跡、土砂や石で川原と化した田畑、埋まって所々首を出した稲穂、これを抜き取っては食料の足しにし、親戚の家に身を寄せさせてもらい、シャベル片手に金折の耕地整理に出かけました。翌年は石原に嫁ぎましたが、こちらには金折ほどひどくはありませんでした。しかし、シャベルが手から離れたのは5、6年後のことでした。

出典：芳川小学校昭和15年度卒業生
喜寿記念文集「思い出の記」

天竜川洪水日記

浜松市南区本郷町 河島五郎

昭和20年10月4日(木) 雨が多い。

昭和20年10月5日(金) 大雨、昼1時間から2時間強風が吹いた。朝からひどい雨。

屋過ぎ、金折の青島氏の南の兵隊が壕を掘った箇所が危ないとの知らせが入る。俵が百俵ほどいるというので、手配している間に途切れたという。芳川役場も事務室・小使室・蔵にある重要書類等を全部

机の上にあげ4時に帰る。その時、役場付近は何ともなかったが、金折へは行けない状態だった。家に帰って、まず、こちらは大丈夫だろうと、電気もこないので寝てしまった。

突然サイレン、すわと起きて出たら、父の「水がきているぞ」の叫びに驚かされる。土間の物は全部上にあげておいたので安心していたが、飯が炊けなくなってはと、1回分炊いたり、縁の下のじゃがいもの種を床にあげた。夜中の12時頃が一番深かったらしく、家の周囲は水、家の出口を出た所で1尺（約30cm）くらい、便所は5cmの冠水、家の西側は足の甲の高さくらいだった。東の方から新川の堤防を越えて落ちる水の音が不気味に聞こえた。西の畑は葉っぱの葉が少し出ている程度、父もこんな体験は初めてという。

昭和20年10月7日(日) 曇り。

今日は新道は水が引き、渡っていなかったので出勤。橋の北側に草屋根がひっかかっていた。役場へ10俵・20俵分という炊き出しのむすびがくる。長上・積志・浜松等から何十俵という量がトラックその他で届けられた。ありがたいもんだと思った。配給に忙しい。今度の水害は金折が一番ひどく、磯部耕平さん宅他9軒流出、20名位が死亡したらしい。村をまわってみて、老間は何ともなかった。役場の事務所は床上約1尺（約30cm）の水で、どろんこになってしまった。浸水の夜、大山君が泊まりでおったが、学校に居た兵隊からもらったカーバイドが玄関の土間にあり、浸水のため突然爆発的に燃えだし、付近では火事だとか大騒ぎ、大山君はそれでも外へ出して処理したが、まだあるかと心配して夜中見廻りしたとのことである。連絡は舟にかぎられ、食料配給も舟でなければ出来ず不便この上なし、まったく困った。

昭和20年10月8日(月) 雨。

堤防の切れ口より古川・金折等へ流れる水が天竜川の主流になり、大部分の水がこちらへ流れて来る始末で、銀行あたりより東は、依然水がひかず乾水の見込みなし。また、台風が同じ経路で来襲していて雨が降る。

昭和20年10月10日(水) 雨。

3つ目の台風が九州南方にあらわれ、西日本は暴風警報、こちらも雨ばかり。今日はまた水がふえ役場玄関まで舟がつくようになる。

昭和20年10月11日(金) 晴れ。

久し振りに秋晴れの天気、寒くなった。地方事務所の人々が切れ口へ行くというので、堀内さんと収入役と同行、大橋から舟で行ったが、石原あたりからは天竜川の激流をのぼるのと同じで、舟をこぐのにおとましかった。金折地内へ入ると瀬があり、家の潰れたものがひっかかっており、何百ともしれぬ大木が横倒しになり、根が洗われている様は、見る者をして恐怖を感じさせずにはおかないと思った。現場へ着いたら、県の人は河輪へも行きたいというので、収入役と堀内氏が案内して行った。

出典：わが町文化誌「水と光と緑のデルタ」
浜松市立南陽公民館編

昭和20年の大洪水

浜松市南区鶴見町 斉藤貞男

小さいころから川中に住み、天竜川は友だちのように育ってきた私である。しかし、昭和20年の大洪水には一瞬身の危険を感じずにはいられなかった。それは、私が旧制中学のころ、秋の長雨で天竜川が増水していたところへ集中豪雨が重なり、水位がどんどん増して堤防すれすれまできた。

今の西鶴見の派出所の近くが道路になっていて、人が歩くので少し低かった。やがて、どす黒い水が容赦なく流れ込んできた。間もなく、濁流と一緒にたくさんの流木も押し寄せてきた。

「これは大変だ。決壊する。ここが切れたら川中は全滅だ」。鶴見の男の人たちは、

俵を持ち寄り近くの土を次から次へと詰め込んで、やっとのことで防ぎ止めた。

午後の3～4時ごろ、半鐘が激しく鳴り出した。同時に水がひいていった。「どこかで切れたな」と思った。案の定、月の輪が決壊したことをあとで知った。水がひいたあとには流木がいっぱい残っていた。

浜松市南区下飯田町 斉藤賢作

昭和20年の10月5日のことだった。当時帰国したばかりのわたしは、食糧難に備え、妻の実家から川舟を借りてきて、川中の大島へ渡り、開墾に精を出していた。

昨日来の豪雨で、川も増水しているだろうと見に行くと、川面はあわを交えた濁流とともに流木がいっぱい流れていた。白いあわが多いときは、まだ増水すると聞いていた。

岸につないであった舟に乗り、漕ぐのに自信のある父と2人で、川の真ん中の、濁流が渦巻き最も速く流れる水流に乗って帰った。

舟を岸へもやいて（つないで）流木拾いをしてしていると、水位が次第に高くなってきた。流木どころではなくなった。半鐘が「ジャンジャンジャンジャン…」とすりぼんでなり、村じゅうの男は堤防の警戒態勢に入った。午後の3時近くになると、濁流は急激に増してきた。

堤防の上で手が洗える。堤防の上を水が流れ始めた。「これだけ溢れては、どこか弱い所が決壊しなければいいが」と、思った。

「安間川堤防の“月の輪（飯田町田畑）”が危ないから応援頼む」と伝令がきた。間もなく、泥水が田畑へ流れ初め、決壊が始まった。

各自、家へ帰り家財道具が濡れないように水揚げの支度をした。5時ごろ、会社帰りの2人が帰宅できずに、わが家へ泊まった。刻々と水位が増し、11時ごろ、床下5寸（約15cm）位で泊まった。これ以上は増水なしと判断し眠りについた。

翌朝早く、越下までつく水の中を堤防へ行ってみた。村の衆から「金折が切れ

た」と、聞かされた。それにしても、安間川の水にしては多すぎると思い、決壊箇所へ行ってみた。堤防が30メートル位切れて、天竜川の濁流が荒れ狂うように流れ出ている。堤防近くにあった店は、土台が洗い流され落下寸前であった。

この洪水は、戦時中、兵隊が掘った防空壕跡が原因といわれ、村境の金折の人たちが大勢犠牲になった。夜更けまで、濁流にのまれて救いをもとめる人々のさけび声が聞こえて眠れなかったと、あとで聞いた。

出典：わが町文化誌「輝くいなほはたの音」
浜松市立東部公民館編

源太夫堀を切って、洪水で溜まった水を排水させた 浜松市南区松島町 高橋勇

旧五島村松島字外野では、天竜川西派川・金折が切れたとき、洪水が来たのは午後6時過ぎだった。我が家は、床上浸水50cm程度で、一週間くらい家の中が水に浸かっていた。その間は、アマ（天井裏）に上がって寝泊まりした。ごはんは、我が家の東側の道路が小さな堤防になっており、周りより1段高いのでそこで飯を炊いた。

松島地区でも外野は、一番東の端なので、援助物資はまったく届かなかった。飲み水は、焼酎瓶の中に炭や石を入れて、濾した水を飲んだ。

しばらくしても洪水が引かないので、家の南の、江戸時代に天竜川と馬込川の連絡運河として作られた源太夫堀の堤防を、村人みんなで切って周囲の水を排水させた。

田圃の水は、水はけが悪かったため1ヶ月もかかった。また稲は、「チュウジョウ」という品種の奥作を作ったが、洪水に浸かってしまったため、稲穂状態で発芽したりしたため、品質がひどく悪い状態の物が、1反当たり、三俵程度しか収穫出来なかった。

洪水にあって大変な被害を受けたのに、それでも供出せよと言われて、仰天すると共に、大変困った。農耕用に牛を飼っていたので、餌が確保できるように、東側の小さな堤防に移して、通常より紐の長さを長くして、牛が縛り付けられないようにした。